

くずし字字典で様々なくずしをみる



(w) は、長い引用になってしまいましたが、難しい部分が多く含まれています。其^ちはこれまで何度か出てきましたが、「其」です。次の其^ちも、第42回で其^ちと出てきた「節」です。今回の「節」と第42回の「節」を比べると、下半分はよく似ていますが、上の方は微妙に崩し方が異なります。

次の其^ちは、「者(は)」ですが、其^ちと其^ちは少し紛らわしいので、改めて並べてみました。前が「其」、後が「者」です。其^ちは、偏は「其^ち」でしょう。旁は^{つくり}ちという感じで書いてあります。この最後の部分(其^ち)は、「す」が「寸」の崩しであることからわかるように、「寸」というパーツが入っている可能性を示すヒントです。この其^ちは「寺」

で、其^ちを付けて「持」という字です。次の其^ちは、「手書き認識」などを手がかりにすれば「夫」で、前の字とつなげて「持夫」です。

其^ちは「之」ですが、次の其^ちは(ここで切れるのかどうかも含めて)難しいと思います。

一件「と」に見えます。其^ちは「の」で、其^ちは、第35回で「其^ち」と出てきていますが、「江」です。したがって「持夫之其^ちの江」ですが、言葉のつながりから「も」だと想像できます。ここは「毛」という字が書いてあり、ひらがなの「も」の元の字です。

次の其^ちは、とても難しいと思います。下に其^ちというパーツがあるので、「心」や「心」が入っている字だということは想像できます。しかし、それだけでは余り手がかりになりません。ワープロの「手書き認識」でも出てこないと思います。

実は、この字は、「懸」という字です。これまでなかったパターンの字だと思しますので、『くずし字字典』で是非この字を引いてみてください。『くずし字字典』でいくつもの「懸」の崩しを見ているうちに、何か新しい発見があるかもしれません。

最後の其^ちは「合」ですので、「懸合」(かけあい)となります。(w)をまとめると、「其節者持夫之もの江懸合」(その節は持夫の者へ懸け合い)となります。

史料(前略)尤御無難之節者、是迄之通可取斗、併御取扱之節、万
 一何連之宿二而不調法等出来仕候義、差状二無之上者、不調法八眼前二
 相見候二付、(w)、勝手次第二先々江御添書、可仕事